第3章　脚をなくした椅子

ことのほか寒さの厳しい朝だった。

井上さんは布団から出る決心がつかないまま、雨戸から洩れてくる光を眺めていた。

今朝も天気がいいようだ。引っ越してきてから一週間、毎日の晴天つづきだ。しかし、温度は確実に下がりつづけている。本格的な冬に入ろうとしているのだ。

せめてヒーターに点火してこなければなるまい、と井上さんは思った。

前夜のうちにタイマーをセットしておけばいいのだが、残念なことに、井上さんも奥さんもタイマーの操作ができない。洋子に何度か教わったが、どうしてか失敗ばかりする。それで、つい面倒になって、セットしないまま寝てしまうことになる。

隣の布団の奥さんは、まだ眠っているようだ。目覚めていれば、とっくに起きだして点火ボタンを押してくれているだろう。わたしは寒さには強いの、といつも言っている。

奥さんは北国に生まれ育った。生家は古いお寺で、火鉢と掘りごたつしか暖房のない暮らしだったらしい。幼いころから毎朝の日課で雑巾がけを手伝っていた。冬の朝は厳しい

寒さのせいで、井戸からバケツへ汲み入れた水に、見ている前で薄氷が張ったという。凍える手で雑巾を絞り、本堂や住居の長い廊下を拭いていくと、すぐに板の面が白くなる。拭いた直後に、廊下の湿りけが凍ってしまうのだそうだ。

井上さんは肩を震わせて、ますます深く布団のなかへ入り込んだ。掛け布団を引き上げていると、ふいに奥さんの声が聞こえた。

「わたしね、小さいころから、ずっと気になってたことがあったの」

くぐもった声なのは、鼻先まで布団に埋もれているせいだろう。

「うちの母さんの、ご機嫌のいい朝と、そうでない朝があってね。それは、どうしてなんだろうって、わたし、いつも思ってたの」

寒さに強いはずの奥さんが、いつになく起きださないのは、むかしのことを思いだしていたからしい。井上さんは黙って聞いていることにした。

「いま、そのわけがわかったような気がするの」

そう言って、奥さんはちょっとのあいだ口をとざした。おそらく頭のなかで、いろいろな思いを整理していたのだろう。やがて、おもむろに話しだした。

「あのころ、母さんは毎朝のご飯を炊くのに、古いカマドに杉の枯れ葉や小枝を詰めて、マッチで火をつけてたの。……それが、なかなかうまく火のつかないことが多くてね。杉の葉が湿っていたり凍っていたり、小枝が生木だったりして」

その経験は、井上さんにもある。少年時代にキャンプで焚き火をしようとして、なかな

か点火できずに困ったことがある。あれは、むつかしいものだ。
二人が結婚したころ、奥さんの生家では、もうカマドを使ってはいなかった。だが、以前はカマドがあったという土間は残っていた。裏の戸口から板敷きの床までのあいだに、およそ三平方メートルの地面が広がっていて、畑から掘りあげてきた農作物や鍬や鎌を置いたり、土の付いた作業着を脱いだりする場所だった。
かつては、その片側に煮炊きするための、大きなカマドがしつらえてあったそうだ。土間の地面は湿気が多く、いつもしっとり濡れていた。ことに雨の日には、薄暗い電灯の明かりを受けると、水をたたえているように光っていた。
杉の枯れ葉や小枝も、だいぶ湿気ていたにちがいない。
「きっと母さんは、毎朝、カマドの火をつけるのに苦労してたと思うの。うまくいくと、……ああ、今朝は火のつきが早くてよかったわ、なんて、ほっとして。そんなときって、すごい幸せを感じてたんじゃないかと思うの」
奥さんの声が、ますますくぐもった感じになった。
もしかしたら、涙ぐんでいるのかもしれない、と井上さんは思った。
「わたしたちの幸せって、ほんとに、そんなことなのね。……わたし、五十年も前の母さんの気持ちが、ようやくわかったみたいな気がする」
井上さんは布団のなかで顎を引いて、ゆっくりうなずいた。
こうして奥さんの思い出話を聞くのは、ひさしぶりだった。

おそらく結婚したてのころ以来だろう。小さなアパートで暮らしていたとき、休みの日の朝などに、よくこんなふうに話をしたものだった。たいていは奥さんの思い出話で、幼いころのことが多かった。

いまの話は聞いた記憶がないから、やはり長いあいだ胸にしまっていたのだろう。

――しかし、こうして話を聞くのもいいものだな。

井上さんは頬をゆるめていた。あらためて結婚当初の朝のひとときが思いだされた。

もうひと眠りできそうな気分になって、井上さんは深い息をついた。そこへ、とつぜん家鳴りのようなひびきが伝わってきた。二階で雨戸を開けている。

「おやおや。今朝は、真上のお宅は早起きだな」

いつもは井上さんのところが一番の早起きなのだが、毎朝これと同じような家鳴りをひびかせているわけだ。さぞかし同じ棟の人びとの顰蹙をかっていることだろう。

「上のお宅は、三十代半ばのご夫婦とお子さんが二人なのよ」

仰向きになった奥さんが天井を見上げながら言った。

「夫婦共働きで、お子さんたちを保育園に預けてるんですって」

「それで、あまり子どもの声がしないんだな」

「朝の出勤途中に保育園へ連れてって、夜の帰宅途中にお迎えに寄るんだそうだから」

「よく知ってるな、そんなことまで」

「引っ越してくる前に、不動産屋さんから聞いたのよ。いちおう、用心のために同じ棟

の三軒についてだけは教えといてくださいって、洋子が言って」
「不動産屋にゃ守秘義務というのはないのかな」
「べつに、プライバシーというほどのことでもないでしょ。……ついでに、そのお隣は独り暮らしの中年男性で、お宅でパソコン関係のお仕事をなさってるんですって」
奥さんは少し得意そうな声になっている。井上さんが驚いてみせたせいだろう。
「めったに外に出てこないから、どんな方かわからないけど。きっと一日じゅうパソコンに向かってるんだろうって、洋子とも話してたの」
「どちらも、この一週間のうちに見かけたことはないな。……で、うちのお隣は、お年寄りのご婦人だ。二、三度、見かけた」
「お隣の小暮さんは、ご夫婦でお暮らしなの。ご主人が、ご病気で寝たきりなんだそうよ。……小暮さんには引っ越しの前日に伺って、ご挨拶しましたよ。お菓子折りを持って」
「それで、この表で出会ったとき、丁重にお辞儀してたんだな」
「たいへんねえ、ご主人が寝たきりというのも」
「……ああ、そうだなあ」
それきり二人は口をつぐんだ。
雨戸から洩れてくる朝の光が一段と明るみを増していた。
「さあてと、こうしちゃいられないわ」
そう奥さんが言って、布団をはねのけ、思いのほか身軽に起き上がった。

井上さんも負けじと身を起こした。気合いを入れたつもりでも、やはり寒かった。大急ぎで衣服を着るうちに、ヒーターの作動する音が聞こえてきた。

――また一日がはじまったな、と井上さんは思った。

雨戸を開けると、林からの陽光とともに身のすくむほど冷たい空気が流れ込んできた。柿の木には、まだ大ぶりな実がたくさん残っている。鳥たちが毎日食べにきても、あと一週間以上はもつにちがいない。

――さて、今日は、どうして過ごしたらいいだろう。

井上さんは光を浴びながら、そう思った。この雨戸を開け放ったら、すぐに顔を洗い、いつもの朝食をとってから、ゆっくりとお茶を飲む。

――そのあとは、なにをすればいいんだ。

ソファに背中を埋めて、ぼんやり林を眺めて暮らすのか。ガラス戸からの陽光に目を細めながら、むかしのことでも思いだすのか。この一週間つづけてきた同じことを、今日もまた繰り返すしかないのだろうか。

井上さんは雨戸に手をかけたまま、短い溜め息をついた。

その日の午後、井上さんは散歩でもしようと玄関を出た。

――さて、どっちのほうへ行こうか。

徒歩十五分の駅の方角へ行けば、途中に商店やマーケットの立ちならぶ大通り。その反

対へ向かえば、二十分ほどで市立図書館。どちらも、散歩にはちょうどいい距離だ。
表の駐車場を前にして考えていると、背後の階段を降りてくる足音が聞こえた。なにかを運んでいるような重い足どりだった。
振り返って見ているうちに、顎ひげを生やした男が椅子をかついであらわれた。かなり太った中年の大男だった。井上さんに気づいて、照れたような表情で会釈した。
「やあ、こんにちは」
井上さんは挨拶しながら、この人が二階の中年男だな、と思った。
「一週間前に引っ越してきた井上です。どうか、よろしく」
「……あ、近藤といいます。よろしくお願いします」
近藤さんは身体に似合わない優しげな声で言い、恥ずかしそうに微笑んだ。
肩にかついでいるのは木製の椅子だった。いまでは珍しい旧式の回転椅子ではないかと、井上さんは見てとった。背の部分に複雑な彫刻がほどこしてある。座の部分は羅紗張りらしい。羅紗の内側で、らせん形の針金がクッションになっているはずだ。
「どうしました、その椅子？」
「ええ、壊れちまいましてね。……今日は粗大ゴミの回収日なので」
「ほう、どこが壊れました？」
「脚なんですよ。……長いあいだ、わたしの体重を支えてきたもんで」
近藤さんは、また恥ずかしげに微笑んだ。なにしろ百キロは優に超えそうな巨体である。

なるほど、と井上さんは納得した。

「学生時代から愛用してきたんですがね、とうとうやっちゃいました」

「どれどれ、ちょっと見せてくれませんか」

井上さんは少し強引なぐらいに言った。どうしても見てみたいと思った。

近藤さんは当惑したらしく、しばらく茫然とした顔つきで見下ろしていたが、

「……あ、いいですよ」

と答えて、椅子を足元へ下ろした。かなり年季の入ったもので、ニス塗りの肘かけや背の木部が鈍い光をたたえていた。頑丈そうなつくりだったが、コンクリート張りの床に置かれると、ぐらりと大きく傾いた。

「なるほど、脚の部分が二カ所、折れてますな」

中心の回転軸を受ける台に四つの羽根のような支え脚がついているが、そのうちの二つが複雑に折れている。よほど体重をかけたらしい。おそらく重たい身体を預けたまま、椅子全体を大きく傾けたのだろう。

「これじゃ、修理はできんだろうなあ」

「そうでしょう？　残念だけど、捨てるしかありませんよね」

近藤さんは頬をゆがめて見せ、また椅子をかついだ。駐車場の隅に粗大ゴミの集積所とされているスペースがある。事前に市役所の係へ連絡して、不要品に有料のシールを貼って回収日に出しておくと、持っていってくれる。

ここへ引っ越してくる前に、奥さんも座布団やマットレスやカーペットなどの回収を依頼していた。まだまだ使えそうなものや長く親しんできたものもあったので、惜しいなあ、もったいないなあ、と井上さんは思ったものだ。しかし、狭いアパートへ移転するのだから、そうするよりほかになかった。

近藤さんは集積所にたたずんで、しばらく名残惜しそうに椅子を見下ろしていた。やがて思いを振り切ったように、大きな身体をこちらへ向けた。のっそりと歩いてきて、

「じゃ、しつれいします」

と軽く会釈して、重い足どりで階段を昇っていった。

井上さんは二階のドアの閉まる音を聞いてから、おもむろに歩きだし、駐車場を横切って集積所まで行った。しゃがんで、捨てられた椅子を見つめた。壊れた脚の各部分をつぶさに点検したあと、うなずいて立ち上がった。

ちょっとのあいだ考えてから、やおら椅子を抱え上げた。まるで重傷を負った人を扱うように、そっと胸に抱き、また駐車場を横切って戻ってきた。玄関のドアを開くと、びっくりしたように見上げてくる奥さんを尻目に、そばの床に椅子を横たえた。

「わたしの道具箱は、どこに置いたかな？」

そう聞いてから、くびをかしげている奥さんにかまわず、さっさと段ボール箱を積み上げてある部屋へ入っていった。

「……引っ越し荷物のなかに入れておいたはずだが」

重たい段ボール箱や衣類ケースをいくつも動かして、どんどん奥へ入り込んでいった。しばらくして、ようやくお目当ての道具箱に行き当たった。

「あったあった。これで、よし」

言いながら、箱やケースのあいだから出てきた。頑丈な木箱を抱えている。縦長の、いかつい箱だ。だいぶ年代物で、もとは白木だった表面が茶色になっていた。

「どうするの、そんなものを持ちだして？」

奥さんが不審そうな面持ちで聞いてきた。

井上さんはかすかに笑って、見ればわかるだろう、と答えた。

「その椅子を修理するんだ。……なあに、むかしとったきねづか、ってやつさ」

木箱のふたを開けると、なかからノコギリ、ノミ、カナヅチといった木工用の道具類が出てきた。それぞれ金具の部分が油紙で包まれている。それをはがすと、つややかな光をたたえた美しいヤイバやハガネが姿をあらわした。

「ひさしぶりだな。……この前、手入れしてから、そろそろ一年たつからな」

井上さんは独り言のようにつぶやいた。

毎年、正月三日に、この木箱を開いて道具類を手入れしている。実際の木工作業に従事しなくなってから十五年ほどたつが、そのあいだ欠かさず手入れだけはしてきた。

すべての道具を点検し、どれにも錆のないことを確認してから、

「さて、どう修理してくれようか」

と、床に横たわった椅子をあらためて見直した。
複雑に折れた二つの脚を動かしてみたり、付け根の部分に物差しを当てて寸法を計ったりしていたが、やがてカナヅチとバールを取りだした。
およそ三十分後、井上さんは二つの脚を取りはずしていた。
「よかった。……軸のほうは軽傷だから、なんとかなりそうだぞ」
はずした脚の寸法をとり、椅子を抱えてベランダへ運びだした。ガラス戸を閉めて、少しのあいだ考えてから、ふたたび玄関へ向かった。
奥さんに見送られて表へ出たあと、ふと立ち止まってコートの内ポケットから財布を取りだした。千円札が何枚か入っている。それを確かめて、表通りへと歩きだした。
だいぶ長い散歩になった。帰ってきたのは二時間ほどたってからだった。脇の下に白木の板を四枚はさんでいる。いずれも厚さ約三センチの板材だ。
奥さんが出迎えて、どこへ行ってらしたの、と聞いた。
「ずいぶん遠くまでおいでになったみたいね」
「ああ、製材所を探して歩いたもんでね。……おかげで、こんな松材が手に入ったよ」
井上さんは得意そうに四枚の板を両手に掲げてみせた。
「運のいいことに、ちょうど建築の木ごしらえが終わったところだったんで、端っこの余りものをタダでゆずってもらった」
「それは、よかったですね」

「これと同じようなものは、うちの工場にゃいくつでも転がってたんだがね」
設計図どおりに木取りしたあとには、たくさんの切れ端が出る。床に転がっているのを集めておいて、冬場には従業員たちが駐車場で焚き火を囲んだものだった。
「いざ見つけるとなると、二時間もかかってしまった。……しかも、さいわいにだ」
井上さんは苦笑しながら、キッチンの床に板をならべ、その前にあぐらをかいた。さんざん歩いてきたので、身体が温まっている。珍しく、いい運動をしたものだ、と思った。
さっそく板の面に寸法どおりの線を引き、それとノコギリを持ってガラス戸の外へ出ていった。ベランダのスペースは狭く、冷たい風も吹いていたが、苦にならなかった。ノコギリを握って、腕を動かしているだけで、気分がよかった。
これからカンナをかけたり、ノミで木組みの細工をしたり、目立たないようにクギを打ちつけたりと、いろいろ作業をしなければならない。
――半分は明日に残しておこう。
井上さんは、そう思った。するべき仕事が翌日にもあるというのは、なんと幸せなことだろう。きっと晴れやかな朝を迎えることができるはずだ。
ふと、さっき製材所で出会った職人のことを思いだした。
五十代と見えたその人は、とつぜん訪ねた井上さんの、椅子を直したいという話を聞いてくれた。必要な板材の材質や厚さや寸法を言うと、それだけで理解したらしく、
「ちょっと待ってくださいよ、ちょうどいい板材があったはずだ」

と言って、木材置き場の隅から四枚の板を探しだしてきた。
「これを二枚ずつ接ぎ合わせりゃ、なんとかなるんじゃないですかね」
そのとおりだった。そうすれば六センチもの厚みのある脚ができるはずだ。
代金を支払おうとすると、いいから、と相手は無造作に言った。
「そいつを活かしてくれりゃ、こっちも嬉しいんですよ」
ほかの木屑と一緒に薪にされるところだったのを、椅子の脚として活かしてもらえたら、この板にとっても幸せだろうと言う。
――いい人に出会ったもんだなあ。
井上さんは頬のゆるむのをおぼえた。
――あのとき、あの人が、あの製材所にいたことが、わたしにとっては幸運で、いわばグッドタイミングだった。捨てる神あれば拾う神あり、というやつだな。
そんなことを考えながらノコギリを引いているうちに、二階の近藤さんのことを思いだした。いくら捨てられた椅子でも、こうして勝手に運んできていいのだろうか。やはり、ちゃんと断っておくべきではないのか。
――そうだ、それを忘れてた。
井上さんはうなずいて、その場にノコギリを置いた。
あら、またお出かけですか、と不審そうに奥さんが問いかけてきた。
「ああ、ちょっと二階へね」

と、短く答えて玄関を出た。
階段を昇っていくと、下の階とそっくり同じつくりの玄関が向かい合っていた。
ハガキ大の厚紙に〔KONDOU〕と印刷された表札が出ていた。ドアのチャイムを押すと、はあい、と例の優しげな声が聞こえてきた。
「とつぜん、すみません。……さきほどお会いした下の階の井上です」
「はい、なんでしょう?」
ドアが開いて、近藤さんの分厚い顔があらわれた。けげんそうな表情だった。
「お忙しいところ、ごめんなさい。ちょっともうしあげておきたいことがありまして」
井上さんは会釈してから、さっそく切りだした。
「じつは、さっきの椅子ですが。……わたしが拾って、うちに運びました。それをお断りしておかなくちゃと思いましてね」
「あっ、そうだったんですか。……どうりで市役所の回収係が電話をくれたんだ。ついさっき、依頼された椅子が見あたらないけどって聞いてきたんです」
「それは、ご迷惑をおかけしました」
「いや、いいんですよ。……それで、あの椅子をどうなさるおつもりなんです?」
「修理しようと思いましてね」
「しかし、さっきは修理できないだろうっておっしゃってたでしょ?」
「いやいや、素人にゃ修理できないって言ったんですよ」

「……え？」
「専門の職人になら、不可能ではありません」
と、井上さんは笑いながら答えた。
「ところで、近藤さん、あの椅子に愛着がおありなんですか？」
「ええ、もちろんですとも。……もう二十年以上も愛用してたんですから」
「ほんとに捨てたくないんですな。直ったら、つづけて使ってもらえますね？」
「はあ、いまどきの椅子はヤワなんで安心して座れないですよ。そりゃ、もっと便利な椅子はたくさん売られてますがね。……じつは前に一度、買ったことがあるんですが、すぐ壊れてしまいましてね。また、あの椅子をひっぱりだして使ってたんです」
「それはそれは。じゃあ、やはり修理することにしましょう」
「でも、……修理してくれる職人さんが」
「グッドタイミングですな。ちゃんといるんですよ」
と、井上さんは愉快そうに告げた。
「ちょうど退屈してる職人が、ここにひとりおりましてね」
「えっ、井上さんが？」
「あの椅子にとってみれば、まさに捨てる神あれば拾う神ありですな」
「ぜひ、お願いします。修理代は多少かかっても……」
「なあに、そんなものはいりませんよ。なにしろ、材料はそろってますんでね。しかも、

親切な人からタダで頂戴した立派な板材が」

井上さんは愉快そうに言って、じゃあ、と片手を上げた。

「さっそく取りかかります。数日中には仕上がると思いますから」

そう言って、ドアの外まで出てきた近藤さんへ笑いかけた。

階段を降りながら、ひさしぶりに気持ちの浮き立つのを感じていた。修理し終えた椅子を近藤さんへ引き渡すときのことを、すでに思いえがいているのだった。

その夕方、井上さんが椅子の脚をつくっていると、思いがけない客が訪ねてきた。

玄関へ出た奥さんがガラス戸を開けて、あわただしく井上さんに知らせた。薄暗くなったベランダから室内へ入ると、ヒーターの温かさが冷えきった身体を包み込んだ。

「しばらくです、井上さん」

玄関に立っていた背広姿の客が、懐かしそうに声をかけてきた。

相手の顔をみとめたとたん、井上さんは絶句して、思わず深々とお辞儀をしていた。

その客は、長いあいだ取り引きをしていた木内金具製作所の社長だった。

井上木工所の創業以来、ずっと家具の把手、蝶番、錠、キャスターなどを注文どおりにつくって納入してもらっていた。いまでは倒産した会社の債権者のひとりとなっている。たしか六十万円近い金額が未払いのままとなっているはずだった。

「……すまない、木内さん。ほんとに、もうしわけありません」

井上さんは、ひたすら謝るしかなかった。
相手は当惑した面持ちで、苦りきったように答えた。
「まあ、そう謝られてしまっちゃ、なにも言えなくなっちゃいますけどね」
「どうぞ、お上がりください。こんな狭いところですが」
井上さんが招じ入れ、後ろに立っていた奥さんがお茶をいれる準備をはじめた。だが、相手は押し止めるようにてのひらを向けてきた。
「いや、どうぞ、もうお構いなく。……この近くまできたので、どうしておられるかなと思って寄ってみただけですのでね」
「よくここがおわかりになりましたね」
「そりゃもう。……債権者のあいだで情報が交換されてますから」
と、相手は言いにくそうに答えた。
「しかし、お元気そうなので安心しましたよ。まだまだご活躍されそうですな」
「いや、すっかり落ちぶれて、急に老け込んでしまったみたいですよ」
井上さんは親しみを込めて、冗談まじりに言った。
同年配のせいか、取り引きをはじめたころから気の合う相手だった。新しい家具のための金具を、何度も試作してもらったことがある。そのつど二人で額を寄せ合って設計図を検討したり、相談し合ったりした。希望どおりの金具が仕上がり、家具が完成すると、二人で祝杯を上げたものだった。

「井上さん、ここで老け込まれては困りますよ」

と、相手は少し硬い表情になって見つめてきた。

「わたしは、あなたが再起されるのを待ってるんです。……われわれのような小口の債権者は債権者集会でも隅っこに追いやられてます。債権の回収だってあとまわしですよ」

住んでいた土地や家は、大口の債権者である取り引き銀行の担保物件となっている。ほかの債権者への弁済は、会社の社屋兼工場の敷地と建物、事務室の備品類、工場内の機械類、残された木材などを換金して支払われるはずだ。しかし、ここでも大口の債権者が優先され、木内金具製作所のような小口の債権者への弁済はあとにまわされるらしい。

「たかだか五、六十万円といわれますが、われわれ零細企業にとっては大金です。じっさい、その金が入ってくるかどうかは、会社の死活にかかわるんですよ」

相手の声が、叱咤するかのように鋭くなっていた。

井上さんは真剣な表情になって深々と頭を下げた。身の縮む思いだった。

「そのとおりです。……それは充分に承知しています」

「それなら、老け込んだなんて言ってないで、再起に努めてくださいよ」

「……そう言われても」

「しっかりしてください。あなたは、まだまだ活躍できる人です。ここで、がんばらなくちゃ、まわりに迷惑をかけっぱなしということになってしまうんですよ」

「……はあ」

「しつれいながら、こんなとこに閉じこもって、楽隠居を決め込まれてちゃ困ります。お宅の倒産で大迷惑をこうむってるわれわれはどうなるんですか」
言いたいことは言ったというふうに、相手は井上さんを見すえながら会釈した。
「じゃあ、これでしつれいしますよ。……あらためて、また伺います」
「あのう、……ちょっとお茶でも」
あわてて奥さんが言うと、ようやく相手は表情をゆるめた。
「奥さんもたいへんでしょうが、どうか、しっかりなさってください」
そう言いながら後ろ手にドアを開け、一礼したかと思うと玄関の外へ出ていった。
奥さんが追いかけるようにして出ていったが、ほどなく表の駐車場からクルマの発進する音が聞こえてきた。井上さんは玄関のそばに茫然と立ちつくしていた。やがて奥さんが戻ってくると、まいったなあ、というふうに力なく微笑んでみせた。
椅子を放ったままだったことに気づいて、ベランダのガラス戸を開けた。冷たい風が吹き込んできた。ふいに間近で、チビの吠える声がした。
ベランダのすぐ下の暗がりに人影が見えた。室内からのわずかな明かりを頼りに目を凝らすと、まぎれもなくチビを連れた真也だった。
「おいおい、どうしたんだね、そんなところに突っ立って?」
「あ、あのう、ちょっと寄っただけ」
どぎまぎしたようすで、真也は答えた。チビがベランダの縁に前脚をかけて伸び上がっ

てきた。手すりの柵のあいだから頭を撫でてやると、嬉しそうに鼻を鳴らした。
「ずいぶん遅い散歩じゃないか。……こんなに暗くて寒いのに」
「うん。……サッカーの練習で遅くなっちゃったんで」
「そうかね。チビが一緒じゃ、こっちへ上がれとも言えんしな」
「いいの。……もう帰らないと、ママが待ってるから」
真也は口ごもりながら言うと、手すりに顔をつけるようにしてベランダを覗いた。
「リーリ。……その椅子、直してんの？」
「ああ、脚が壊れてるんだよ。また明日のお楽しみだ」
「ぼく、明日は早くくるから、直してるとこ見てもいい？」
「ああ、いいとも」
「じゃあね。……エーバ、さよなら」
ガラス戸のなかで笑いかけている奥さんにも挨拶して、真也は引き綱を引いた。伸び上がっていたチビが身体を反転させて、勢いよく走りだした。
「気をつけて帰るのよ」
奥さんが声をかけたときには、もう真也は暗がりの向こうへ消えていた。

ひとりごと　だいじょうぶかなあ

ほんとに、びっくりしちゃった。

けっして盗み聞きしようと思ったわけじゃなくて、リーリんとこの玄関まで行ったら、とつぜんドアの向こうから男の人の声が聞こえてきたんだ。

なんだか怒ってるような声だったし、それに答えてるリーリの声もかすかに聞こえたけど、どうも謝ってる感じだった。

そのあと、いきなりドアが開いて男の人の背中が見えたんで、あわてて外へ飛びだして、ベランダのほうへ逃げたんだ。すると、こんどはガラス戸が開いて、リーリが出てくるんだもの。そっと隠れようとしたら、チビのやつが吠えだしたんだ。まいっちゃったよ。

どうもリーリは、しょげてるみたいだった。さんざん叱られたあとって感じ。ぼくだって何度も経験してるから、なんとなくわかるんだ。だいじょうぶかなあ、リーリ。

でも、ぼくが聞いてたことを知ったら、いやな気がするだろうな。

だから、ママにも言うのはやめとこう。

あの男の人が、だれなのか。なぜ、リーリが謝らなくちゃなんないのか。いろいろ知りたいんだけど、きっとママは答えてくれないだろう。それどころか、二度とリーリんとこへ行っちゃいけないって言われる気がする。

もう一つ、気になってることがある。このごろ、チビのようすがおかしいんだ。

散歩してると、ときどき急に歩かなくなって、ガフガフって変な咳をするんだ。そのあいだは、いくら綱を引っ張っても、びくとも動こうとしない。そればかりか、昨日は、咳をしながら地面にへたり込んでしまった。

そうかと思うと、今日なんか、すごい力で綱を引っ張って先へ進もうとするんだ。リーリんとこに行くときだったから、早くリーリたちに会いたかったのかもしれない。帰りはまた道路でへたって、ガフガフって苦しそうに咳き込んでた。

いっぺん獣医さんに診てもらったほうがいいかもしれない。今夜にもママと相談してみよう。でも、ママがわかってくれるかどうか。おかしなことに、チビは家のなかじゃ、ぜんぜん咳き込まないんだ。まさか遠慮してるわけじゃないんだろうけど。

たまに優香のやつが、気まぐれにチビをかまうことがある。ソファの上に寝そべってるチビのそばに腰かけて頭を撫でたり、くびに抱きついたり、みょうにべたべたするんだ。チビは迷惑そうに、なんとか逃れようとする。けっして噛んだり、うなったりはしないので、優香はますますしつこくなる。チビは、じっと我慢しながら、ぼく

のほうを見てる。

——ねえ、なんとかしてよ。たすけてくれよ。

チビ、おいで。ぼくが呼ぶと、待ってましたとばかり優香を振り払って、一目散に逃げてくる。そんな身ぶるいするようなときでも、ぜったい咳き込んだりはしない。

リーリはベランダで椅子を直してるらしい。見たことのない大きな椅子だったけど、あれはだれのかな。明日は、もっと早く行って、直してるとこを見ようっと。